

## ひとつのいのち

渡邊 愛子

### はじめに

皆さん、おはようございます。試験前の心忙しい貴重な時間にお集まりいただきうれしく思います。宗教講座に初めてお招きをいただきました。本題に入る前に思うことを少しお話させていただきます。ある時、混んだ電車の中でおしゃべりが聞こえてきました。皆さんと同じくらいの年齢だと思います。「宗教やってる?」と言うんです。その友だちが「宗教なんか、危ないもん、やめとき」と返事をしました。私はその時、何とも言えない、たまらない思いが致しました。私の世代の人たちが思っている宗教

という言葉と若い皆さんが宗教という言葉に感じる雰囲気非常に隔たりがあると思  
 いました。無理ありません。オウム事件がありました。最近またオウムの重要な  
 人物が出てきてどうなるか。ざわざわとした不穏な空気がテレビで報道されていま  
 さら。恐ろしいな宗教という衣を借りた団体があつて、そこに若い「優秀な」と世間  
 では考えられている「よい学校」を出た「頭のよい」人たちがそこに入って、とんで  
 もない反社会的、反宗教的な行ないをして、日本だけでなく、世界の人々を慄かせて  
 いる状況があります。「宗教ってああいうものか」と思う、そのことが大変寂しく残  
 念に思われたんです。宗教が実に軽い、カード会社のキャッシュレスを使いすぎて利  
 息が膨らんで自己破産の憂き目にあつたような軽さで宗教が認識されているという事  
 実、それが願わくば少しであつてほしいのですが、ひよつとして皆さんの中にも、そ  
 のように宗教を考える、触れずにおこうとお思いの方がいらつしやるかもしれないと  
 思つたりします。でもここは光華女子大学です。宗教立の大学であることをご承知の  
 上で、希望してお入りになつたわけですから、私の杞憂であろうかとも思つたりして  
 います。

## ひとつのいのち

私はどうかと自分に聞いてみますと、私自身、宗教の専門家でもありませんし、宗教学も本当のところを知りません。宗教講座の場に立たされて何の話ができるかと自分に問うことになったわけです。完璧な答えを差し上げるのは無理なことです。おそらくこういうことではなからうかと、今まで生きてきて感じた、その方向に一生懸命歩いてきた、それは多分間違っていないなからう。模範的な真宗教徒ではありませんが、多分、この道を歩いていけば間違いなからう、この道を歩いてすばらしい一生を終わった方々がたくさんいらつしやる。この道を歩けば間違いなからうということは申し上げられると思います。

### 一 私にとって「宗教」とは

私の中の宗教というものは何か。仏教とかキリスト教、イスラム教という名前は別にして、どうしてか知らないけれど生まれて、どうしてか知らないけれど死というものがある。長さも人によってまちまちで、この人生を本当に安心して心安らいで、虚

しさを越えて人に生まれてよかったという日々を送る。今日一日いい日だった。よかったと安らげる人生を送るために一番大切な部分を司るもの、たとえて言えば、私自身の中の心の井戸掘り作業のような感じですよ。井戸掘りの大変さを実際に知ってはいないので、私において宗教というものは心の井戸掘り作業ではないか。どこか奥の方にきつと確かなものがあるに違いない。人によって確かなものと思うものはさまざまでしょう。自分の奥の奥の方に妥協せず「こんなもんか、仕方がないや」ではなく、自分の心の中を掘り下げていった奥のところには何か水脈があるに違いない。その心の中の井戸掘り作業を進めていくことが私にとっては宗教的な思いです。井戸掘り作業の方法は人によって皆違います。皆さん方は学生として井戸掘り作業をなされば、心の奥の方に何かを見つけられる。一番底にあるものに触れるのは、ご縁と申しますか、人によって早く見つかる方も遅く見つかる方も、見つかったけれど気づかずには、またやり直してみたりと、さまざまだろうと思います。

平生私たちは目が二つ外に向いてついで、外に外にと目を向けて暮らしています。外にだけ目を向けていると、忙しくて気がつかない時はよろしいでしょうが、

ひとつのいのち

ふと気がついた時、そこに虚しさ、「これでいいんだろうか、大事なものを見失ってはいないか」と思うのではないかと思います。目は外に向いているけれども、心の目は中に向けることができます。物質的なことや世間的な問題に目や耳が外に向いている中で、中に向かう、それが宗教ではなかるうかと思えます。井戸掘りに思い至ってから、途中で迷いこんだり、困った時、「きつと今大きな岩にぶつかっているんだわ。一生懸命すれば、あるいは念じて待てばこの岩の下に、障害の下にきつと何かがあるに違いないわ」という気持ちで日々暮らしています。今日は、井戸掘り作業の五十数年の生活の中で、ようやくと見つけかけたもの。それが確かなものか、まだわかりません。多分確かなものに根が共通しているだろう、根ざしているであろうという予感に、ようやくたどり着いた。トンネルの向こうに少し光が差してきました。そのことについてお話させていただこうと思っております。

二 「ひとつ」の「ち」 — 「Jiraka」との出会いから —

「ひとつのいのち」と書きました。漢字より平仮名の方が、私の思いに近い気が致します。「ひとつ」について一緒に考えてみて下さい。「ひとつのいのち」とご覧になった時、どうお考えですか。「私のひとつのいのち」とお考えの方が多いのではないでしょうか。それは間違っておりません。そのかけがえのない「ひとつのいのち」を、とことん追求していくと、「私のひとつのいのち」が孤立した「ひとつ」の存在ではなく、実は無限の「ひとつのいのち」に根ざしている。時間的にも空間的にも、ここでお終いという限りがない。限りがないから一つ、二つと数えられない。「ひとつ」と言わざるをえない。「ひとつ」という言葉に数えられるものと数えられないものと二つ意味があるのは言葉の矛盾じゃないかということになりそうですが、私の中で、あえて平仮名で「ひとつ」と書いたのは、数えられる一つではなく、二つないから「ひとつ」としか言えない「ひとつ」を申し上げたかったです。それではどうして

ひとつのいのち

「ひとつのいのち」を感じるようになったかということをお話させていただきたいと思います。

この大学にご縁ができてからインドの古典文学という授業をさせていただいています。ご縁があつて三十数年かかわってきた仏教のジャンルは『Jataka』です。これに大学時代出会つて以来、ずっと『Jataka』のテキストの中をうろろしながら三十数年経てきました。その中で「ひとつのいのち」という感覚に出会うことになりました。

そもそも『Jataka』に出会うことになったきっかけは、一生懸命仏典を読んで出会つたという模範的な出会いではなく、ほんの偶然というか、必然というか、私は非常な貧乏学生でした。今の皆さんからは想像もつかないくらいの貧乏学生でした。一日の食事は食パンが二枚、スキムミルクが一杯、食パンにはマーガリンをつけました。そういう貧乏学生時代を送ったわけです。その時、たまたま『Jataka』を童話に書いてみませんか」という思いもかけない、「棚からぼた餅」、ぼた餅どころか私の一生の方向を決めてしまう大変なものが舞い降りてきたわけです。私はその時、『Jataka』が何だか知りませんでした。知らないものを書く。しかも童話に書く。一回も書いたこ

とはありません。知らない「rakka」を、書いたことのない童話にして、東本願寺から出版されている『同朋』という月刊雑誌に連載するのだということです。うれしいチャンスには違いないけれど、何も知らない学生がそんなことをしたら大変なことになるだろうと躊躇しました。しかしやってみなければわからない。書いてみて、出来が悪ければ向こうから断る。何とかなるようだったら載せるということでしたので、試験のつもりで『rakka』に初めて対面致しました。

『南伝大蔵経』と申しまして、大抵のお経はインドから北を回って漢訳されて漢文で書かれている經典です。しかしインドから南周りでスリランカを通して東南アジアを通ってきたパーリ語で書かれたお経があります。その現代語訳、二八―三五巻の分量です。何が書いてあるのだろうと必死で読んでみました。夢中に読み進んでいるうちにびっくり致しました。「あれ、この話知ってる。どこかで聞いたことがある。読んだことがある」という物語にチラチラ出会うわけです。五四七のストーリーが載っていますが、いくつも聞いたことがある、見たことがあるというものに出会って興味を惹かれました。さらに読んでいくと、大変懐かしいものに出会いました。たとえば



ひとつのいのち

「兎本生物語」です。『Tataka』はパリー語、サンスクリットで、中国の方が「本生経」と申します。『南伝大藏経』のその部分は「兎本生物語」となっています。満月のお月さまに兎がいるというのは、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんから、あるいは幼稚園でお聞きになったことがあるのではないのでしょうか。兎さんがお餅をついている話かもしれません。満月を見た時、影になっている形は兎の姿なのだと言ったことがあります。聞いたことがあったどころか、私にとって大変懐かしい思い出で、小学校一年生の時、六年生のお兄さん、お姉さんが学芸会で劇をしてみせて下さった、その話そのものが『Tataka』の中に「兎本生物語」として載っています。

私の今日のありますのは貧乏のおかげだと思っています。笑って「貧乏神様ありがとう」と冗談を言うんですが、貧乏が大変役に立って今の私を作ってくれているのです。貧しかったので幼稚園にはやってもえなかつた。小学校に入っても名前の読み書きも何もできない、そういう子どもでした。一年生の時、背が低いので一番前の席で生まれて初めて劇を見ました。今のようにテレビがない時代です。ラジオは大分後

から我が家に入ったので、文化的なものに触れることがほとんどない子ども時代でした。ポロポロに破れた絵本が数冊あった記憶はあるんですが。一年生の秋、学芸会がある。とても楽しそうな予感がして、一番前の席で胸をわくわくさせて見ていた。六歳の時のことです。六年生が「兎生物語」の劇をやってくれました。

インドのある森の中に兎と猿と山犬とカワウソの四匹の動物が仲良く暮らしていました。兎は優れた心の持ち主でした。いつでもよいことをしようという気持で暮らしをしていたと経典には書いてあります。三匹の仲間たちも兎に従って、自分たちも悪いことはしないでよいことをしようと暮らしていた。ある時、見すばらしい身なりのおじいさんがやってきた。お腹も空いている。あのおじいさんに何か食べるものを探してきて差し上げようと動物たちは森の中に食べ物を探しに行きました。お猿はマンガーを見つけてきた。山犬は肉の塊。カワウソは赤魚、それぞれが川べりに置き去りにされているもの、他の動物が食べ残したかもしれない肉の塊を探してきて、おじいさんに差し上げることになった。ところが一番に言いだした兎は、その時、どうしても食べ物を見つけれなかった。他の動物が持ってきた食べ物を焼こうと焚き火をお

ひとつのいのち

こした。その焚き火の中に兎が身を翻して、「私は差し上げたいけれど何も無い。どうぞ、私を食べて下さい」と言って兎が火の中に飛び込んだ。見すばらしいやせ衰えたおじいさんは、実はインドの神様で帝釈天でした。因陀羅神です。たちまち元の姿に返って、飛び込んだ兎をさっと抱きとめた。兎の毛は一本も焦げていなかったと書かれています。「この兎は私に何かを施したいと思ったが何もなかったので、一番大切な自分の命を捧げてくれた。これはすばらしい行為で、未来永劫、人々に、生きとし生けるものに知らせたい」と言って、その時、お月様に兎の姿を描いたということなんです。

私が六歳の時、初めて見た劇でした。終戦直後のことですから、モノもない、ハイテクも何もない時代です。焚き火というのは、先生が電池と赤いセロファンを使って、数本の薪のようなもので囲って焚き火にしたに違いなかった。そんなお粗末なものでしたが、私にとっては初めて見る劇、同じ学校の先輩がやってみせてくれた劇です。大変なショックを受けました。何というすごい物語があるのだろうと深く感動した。その後、その話に会うこともなく大学生になったわけです。ところが、大学で

『Ataka』を童話に書けと言われて、その本を読んだら、その中に出ていた。私はもう、たちまち六歳の昔に帰り、懐かしくて、その感激が蘇ってきました。そこで迷うことなく、一番最初に「月の兎」という童話を、与えられた枚数に書いて届けました。素人の書いた決して立派な出来ばえではなかったと思うのですが、幸か不幸か、その時の担当者の方が「だんだん上手になるでしょう。これでよいとしましょう」とパスさせて下さった。そこでまだ二十歳そこそこの皆さん方と変わらない私はものを書いて、活字になって読まれるという大変重い立場に立たされることになったわけです。家から一銭も仕送りはなく、八千円の奨学金で一か月間暮らしていくのですから、アルバイトもしなければいけない。夜寝る間を割くしかない。『Ataka』を必死で読みふけりました。大変感動致しました。その中から毎月、今月はこの話というふうにして一五編の童話を書いたわけです。一年後、一応の仕事は終わりました。ただ必死で毎月の連載に間に合うように書くだけでした。終わってみると、これがまた何としてもしっかり読まなければならないものとして立ちはだかつてきた。童話にすることは置いておいて『Ataka』にもう一度対面してみることになりました。『Ataka』のわ

ひとつのいのち

かる範囲のことをまとめてみようかと修士論文を書いたわけです。

『Jataka』では、今のお話の兎、これがお釈迦様の前の世の姿だということ。

五四七の『Jataka』の物語は、すべて釈尊、ゴータマ・ブツダが過去世において、これこれしかくの善い行ないをなさったという、善い行ないを集めた物語集です。それはどういふことかと申しますと、仏教では「輪廻転生」と言われます。私たちは、生まれて、何十年か生きて死ぬ。それだけで終わりではないとインドの古代の人は考えた。これは仏教だけのオリジナルではないんです。仏教以前の遠い昔から、人は生まれて死んでお終いではない。いのちというものは、無限の過去から無限の未来までずっとつながっているという、インドの古代の思想がある。どんなに文明が進んで、どんなに速くまで見ることができたとしても見尽くすことのできない広い世界、世界というと辺へらがあるかもしれない。無限のいのちとしてしか言いようのない滔々としたものが流れていて、その一時期、今、私たちは人間として日本の光華女子大学の学生として、講師としてここに集まっているという考え方です。今、なぜ私たちはここで人間として生まれているか。輪廻転生の説明では、人間に生まれるにふさわしい

行為を過去の世でしたから人間に生まれたと説明してくれます。誰もこれを証明することはできませんね。目に見える形で理科的に証明することはできません。証明できないから嘘かと言うと、そうとも言えない。嘘なら嘘でもちつとも構いませんという氣もしますが、古代のインドの方々は「いのち」をそういうものだと考えた。過去に人間として生まれるにふさわしい行為をしたから私は人間として生まれてきた。だから人間に生まれた。過去の時代に悪いことをしていたら人間としては生まれなかった。他のものに生まれていたかもしれない。

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を思い出されませんか？ カンダタという非常な極悪人がいて、悪事を重ねたので地獄に落ちた。苦しんでいるカンダタをお浄土のお釈迦様が蓮の池の下の方にご覧になった。「自業自得とはいうものの何と哀れな」と思いますが致しているとそのカンダタが一度だけ善いことをしたことをお釈迦様が覚えておられた。一匹の蜘蛛を見た時、平生なら踏みつぶしたかもしれない。しかしカンダタが一回だけ踏まないで逃してやったことがあった。お釈迦様が「一度だけでも善いことをしたんだから何とかして助けてやりたい」とお思いになって、蜘蛛の糸をはるか彼方

ひとつのいのち

の地獄にお下ろしになった。カンダタはそれを見つけてシメタとばかりにしがみつき、よじ登った。途中でふと下を見ると、自分一人がつかまってもいつ切れるかわからない細い蜘蛛の糸に、自分の下に、地獄で苦しんでいたたくさんの人たちが登ってくる。カンダタは「自分のために下ろされた糸だ。お前たちのものではない」と叫んだら、たちまち蜘蛛の糸は切れてしまった。カンダタは元通り地獄に真つ逆さまに落ちてしまったという話です。これも輪廻転生という仏教以前から行われているインドの豊かな生命観に基づいて、芥川龍之介が作ったものです。

「地獄」「餓鬼」「畜生」「阿修羅」「人間」「天」という六つの境涯を人は経めぐっている。経めぐるのはこの順番ではなくて、その前にした行いによって地獄に落ちたり天の神様になったりするのだということです。そういう輪廻転生の思想が広く行き渡っていたので『Jataka物語』がよく受け入れられた。「ゴータマ・ブッタという人があのようにすばらしい人物として仏教を開いて下さったのには、きっとあの方は過去世において無数の善いことをしてこられたから、結果として仏陀、目覚めた人になられたのだ」と考えて、人々はお釈迦様の過去世の善い物語を次々に書き加えていき、

まとめられたものが、五四七の『Ataka』という仏教文献として今日に伝えられているわけです。個々については図書館にも真宗文化研究所にもわかりやすく書かれたものがありますからご覧下さい。

### 三 『Ataka』の教えと生活 —スリランカの旅から—

『Ataka 物語』を長い間読んできて、途中でわからなくなっていました。最初は感動しました。これが『Ataka 物語』なのか、すばらしい、と読み続けてきましたが、だんだんこれは倫理物語ではないか。よいことをすればよい報いがある。それはその通りで、悪いことではないけれど、なぜそれが何千年も伝えられてきたのかわからなくなりました。東南アジアの国々では現在も、諸々の演劇、紙芝居などで語り伝えられているのです。スリランカのお坊さんから聞いたり、スリランカを旅して本当だと思ったことですが、『Ataka』によって生き物のいのちを殺さないという教えが今も生きている。生き物のいのちをいただかなくては私たちは生きていけないの



ひとつのいのち

ですが、戯れに、自分の私利私欲のために生き物のいのちを殺さない。今日一日の私のいのちをつながせていただくためのいのちはありがたいただかざるを得ないけれども、しかし他のいのちはとらない。自分に恵まれたものは自分だけで独り占めせず、必要な人たちと共にする布施の精神をはじめとする六つの徳目、布施、持戒―戒律を守る、忍耐すること、精進努力する、心を鎮めて物事を正しく見る禅定、そこから出てくる知恵を働かせて人生の難問を解いていくということを教えて下さる徳目を説く物語が延々とつながっているわけです。それはそれで立派な働きをしている。

スリランカに行く前に「渡辺さん、あちらは蚊とり線香が大変質が悪いので日本を持っていった方がいいですよ」と言われて、日本の蚊とり線香を持ってまいりました。あるお宅で夜、寝室にまいりましたら先に蚊とり線香が用意されておりました。折角つけて下さっているものを性能が悪いそうだから自分のに取り替えようというのも抵抗がありまして、その蚊とり線香をじっと見ておりました。部屋には蚊がたくさんおられます。蚊を見ておきますと、スーツと上がっていつて寝室の窓の上に欄間がある。その窓は荒い目の網だったり金属製の棧だったりして、かなり大きなものが行き

来できる。蚊は蚊とり線香に追われて出ていく。日本の蚊とり線香のコマーシャルはどうなっていますか。蚊がポトンと落ちて死んでいませう？ 私たちは蚊というものは必ず刺すから殺さなくてはならないものだと子どもの時からそう思い込んでいる。蚊がいると殺す、何とも思わずに。でもスリランカでは殺さないんです。そのままひと晩一緒にいられると刺されて困るから寝る間だけは「すみませんけど、外に行つて下さいな」というのがスリランカの蚊とり線香でした。スリランカの親しいお坊さんが「日本人はあまりにも無益に他の生き物のいのちを殺す」と嘆いておられたのを思い出して、なるほどと思いました。

スリランカで文明の進んだ暮らしをしているお宅に招かれました。スリランカではふつうお客様だけに家族がおもてなしをする。一緒にテーブルにつかずに、ご主人が立って客人に対して「これはいかがですか。これをおとり下さい」とサービスして下さる。ご自分と一緒に食べない。ところがそのお宅は西洋風にご夫妻共に席につかれるというお宅でした。日本では考えられないような豪華なお宅でした。ところが部屋の隅を他の虫が行列して歩いている。衛生思想が悪いからではないんです。その家

ひとつのいのち

のお嬢さんは医学部に行っている。私たちに害をしないものをわざわざ殺したり、家の中は人間だけが住むところだから他の動物は外に追いやる、殺してしまうという感覚を持たないんです。一緒なんです。その家には部屋の中に池がありました。想像がつきますか？ 庭ではない、応接間の床の一隅に池ができています。池に魚がたくさんいる。池の部分の天井は屋根が動くようになっていて、池の生き物たちが水がほしい時、雨が降ったら開ける。日本ではしたくてもできません。畳ですから。スリランカは石造りですから雨が降ったら雨を池の魚たちに与えてあげる。雨が上がったから気温が高いので石が乾いて雑巾で拭かなくても問題がない。そういう豪華な暮らしをしている西洋風の家で部屋の中に他の生き物がある。天井にヤモリがベタベタいるんです。夜中に寝ていて落ちてきたらどうしよう大変不安になりましたけど。

スリランカの人は誰でも『Jaraka』を知っています。皆、子どもの時から家族に聞かされて、お寺の日曜学校で聞いて、学校でも習います。人間のいのちも、どんな小さな虫も、いのちとしては同じものである。同じ重さである。同じ大きさであるという考え方がしっかりとしみ通っている。その例として「シビ王本生物語」をご紹介致

します。お腹の空いた鷹が鳩を追ってきた。鳩が王様に助けを求めて文字通り窮鳥懐に入ったわけです。王様は鳩を助けるために、鷹に自分の体を、鳩の目方だけあげればいいと思い、鳩の目方分の自分の肉を削いで秤で計った。しかし秤は釣り合わない。足しても足しても秤は釣り合わない。遂に体ごと乗って、やっと秤が釣り合った。こんなこと考えられませんね。私たちが外に向いた目で見える尺度ではない尺度を『Jataka』は持っている。仏教思想は持っている。インド思想は持っている。日本にだってありますよ。そのようにいのちというものは、王様であろうと、インドのカーストの下層にも数えられないチャンダーラの人であろうと、何であろうと、いのちは全く同じだという感覚を『Jataka』が持っている。それが現にスリランカで生きている。たまたまた行った日本人の足を蟻が刺したので潰したら、それを見ていたお坊さんが、「日本人だろう、仏教徒だろう。なぜそういうことをするか」と叱ったという話を聞きました。『Jataka』で育った人々、スリランカの人々は、いのちというものについて、そういう感覚で生きているということです。

ひとつのいのち

四 ひとつの「いのち」―その時空―

それはそれで大変立派なことですが、何十年も読んでいるとそれに慣れっこになって、単に倫理道徳を説く物語なのかというダレた気持ちに数年前からなっております。何となくつまらない気がしてきました。もっと高尚なものを選んでおくべきだったかなと身のほど知らずに思ったりしました。ところがその頃、私の恩師、現在も指導して下さっている方が、「君、『Ataka』をやっていてよかったね」としみじみと感心されたんです。内心驚きました。この先生は私が『Ataka』を始める時、「君は女だからね、どうせ難しい哲学はわからんだろう。『Ataka』くらいが適当だろう」とおっしゃった。腹が立ちました。「何という男女差別をなさる、それでも仏教徒ですか」と言いたくなったのを覚えております。その同じ先生が何十年もたって私に「君、『Ataka』をやって実によかったと思う」と。最初にバカにされた時の方が気持ち良かった。先生が感動するほど私自身はまだ何も見つけていなかったのです。確かに

いくつかの本が出版され、読んで下さった方々から過分のお手紙をいただき、今も大きな箱の中で私の宝物になっています。読んで下さった方々の方が私よりも優れていらっしゃる。書いたもの以上のものを読み取って下さる。そのお手紙によって私は育てられてきたのです。

ハタと困りました。先生から褒められて居心地が悪い。そこでもう一度と想って、『Ataka』を読み直してみました。3Dの写真、ちよつと見れば普通の写真ですが、二次元の写真の奥に別の物体が見えてくるものがありますね。あれに似た感動に出会いました。それまで私は『Ataka』を個々に「これはこういう話、なるほどいい話だ」と表面的に読んできた。一つひとつの話はすばらしいお釈迦様の善業が書いてある。それが全部バラバラだった。ところが、もう一度『Ataka』に向かってみると、3Dの写真を見るように、今まで見ていた『Ataka』の字面だけのものから奥に違うものが見えてきた。話としては作られた話で、誰も証明できない。お釈迦様がおっしゃったと言っても信じられない人もいる。そのようなたとえを通じて何をメッセージとして伝えてくれているのかに、ようやく思いが至った。それは個々一つひとつはバ

ひとつのいのち

ラバラの別々のいのちであるけれども、そのいのちは、空間的に言えば、根っこ、時間的に言えば、無限の過去があつて、無限の過去からのちがずっと繰り返されてきた。川の流れのように。そのようにしていのちというものが連綿と無限に流れている。そのいのちの中に私もいる。「Yataka」の物語は一見すると、ただの倫理的な個々の物語にすぎないけれど、よくよく見ると、そのようなことを私たちに伝えようとしている。昔からの時間のつながりがひとつのいのちが3Dの写真の奥のように見えてきました。

同時に横の広がりでもある。我が家はひよんな偶然から大勢の外国の方がやってきて、二晩泊まってお話をしていく家庭になりました。世界中のいろいろな国から今までに二三〇人位の人が来て泊まって行って下さる。そういう方々とお話をする、信じられないほど不思議なことたくさん出会います。行ったこともない遠い国の、会ったこともない初めてのの人と、心の底で共感するということがあります。あるスウェーデンの女性で一八歳の一人息子を亡くされた方が四年間、茫然自失の状態で、生ける屍のごとく生きてきたけれども、ある日、夢を見た。亡くなった息子さんが非常

に悲しい顔をして夢に現れた。それで突然目が覚めた。ああ、私は亡くなった息子のことだけを思つて、四年間を虚しく生きてきた。そのことを息子が悲しんでいることに気がついた。そこで私はもう一度、もとの自分に帰ろうと思つて、息子がいなくなつた頃の私があつたということに思い至つて、その時、私は日本にいたことを思い出して日本にやつてきましたと。息子さんを亡くした辛い経験や家族の連綿とした歴史を話して下さつて、私はひたすら感動して聞いていました。聞き終わつた時、彼女はこう言いました。「あなたはもしかすると過去に私の姉妹だったんだわ」とおっしゃいました。荒唐無稽のことではなく「そうかもしれない」と抵抗なく思えるような気分になつておりました。

時間的にも空間的にも、私たちは皆、違ふいのちですが、そのいのちを訪ね、訪ねて、外に訪ねなくても自分の中に訪ねて、井戸堀り作業で、今、自分がなすべきことを一生懸命やつていくことで水脈に出くわすに違ひないと思うんです。「あなたはクリスチャンですか、仏教徒ですか」と言われれば「仏教徒です」と答えますが、家に見える方はほとんどクリスチャンの方です。お話していると非常に共感することが多



ひとつのいのち

い。私たちは日本に生まれて仏教を通じて井戸の底に分け入ることができます。他の宗教の方は他の宗教の立場から自分の心の中を深く掘っておられる。「ああ同じだな」と思うことがよくあります。そのことをチャップリンの映画『ライムライト』の中で、チャップリンが登場人物に言わせています。カバレロという男性とテリーという女性が恋愛して一緒になりました。最初はテリーがカバレロの苦境を救うのですが、後に踊り子であるテリーが足が悪くなって踊れなくなる。踊り子として致命的です。その時、カバレロがテリーを励まして、こんなふうに言います「宇宙のことを考えてごらん。宇宙に遍満する力があるだろう。見えないけれど、宇宙に遍満する力が地球を動かしている。地球を動かしている力が皆の中に宿っている。一人残らず皆の中に宿っている。ただそれに気づくか気づかないかだけの違いだ。テリー、今、君がすべきことは、君の中にも君を動かし、地球を動かし、宇宙を動かしている力があることに気づいて、それを生かす勇氣だ。それだけだ」。それが今、申し上げている「ひとつのいのち」だと感じました。仏教とは違う素材の中で、いろいろな物語や歌や詩の中で、あの方も、この方もというように近頃たくさん出会います。

ところでまだ私は、3Dの写真の中の別の像を見つけた段階です。それでお終いではいけない。まだ私はそれを見ているに過ぎない状態です。見えなかった時より一歩前進だけども、今度は自分も丸ごとその中に入って、その中で生きる、活動しなくではいけないと思っております。

行基菩薩に「ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば、父かと思ふ、母かと思ふ」という歌があります。昔は「なんてロマンチックな人だわ、お坊さんなのに」という程度にしか思わなかったのですが、今改めて『Jaraka』の井戸掘り作業に従事していると、行基菩薩も山を歩いていて山鳥の声を聞くと「お父さんかもしれない、お母さんかもしれないと本当に思ったんだな」と思います。芭蕉の「ゆく春や、鳥なき魚の目は涙」という俳句もあります。学校で習った時は浅い程度にしか思いませんでしたが、『Jaraka』を通じて「芭蕉も春を惜しんで鳥が泣いている、魚も泣いていると本当に思われたに違いない」と今、思います。皆、同じことを考えていると気づく、この頃うれしくて仕方がないんです。

ひとつのいのち

おわりに

最後に、近頃、同じだなと思いましたが、童話を聞いていただきたいと思えます。「葉っぱのフレディ」。ご存じですか。「ひとつのいのち」ということをアメリカの哲学者レオ・バスキアという方も同じように思っておられたという感動です。

春が過ぎて 夏が来ました。

葉っぱのフレディは この春 大きな木の梢に近い 太い枝に生まれました。  
そして夏にはもう 厚みのある りっぱな体に成長しました。  
五つに分かれた葉の先は 力強くかかっています。

フレディは 数えきれないほどの葉っぱに とりかこまれていました。

はじめフレディは 葉つばはどれも自分と同じ形をしていると思っていました。やがて ひとつとして 同じ葉つばはないことに 気がつきました。となりのアルフレッド 右側のベン すぐ上のクレアは女の子です。みんな春に生まれていっしょに大きくなりました。春風にさそわれて くるくる 踊る練習をしました。日光浴のときは じつとしているのがよいということも覚えました。夕立ちがくるといっせいに雨に体を洗ってもらいました。

フレディの親友は ダニエルです。だれよりも大きくて 昔からいるような顔をしています。考えることが好きで 物知りでした。ダニエルはフレディにいろいろ教えてくれました。フレディが木の葉つばだ ということ。木の根っこは 地面の下にあつて 見えないけれど 四方に張つていて だから木は倒れないこと。目の下にあるのは公園で おはようとあいさつにくるのは小鳥たちであること。月や太陽や星が 秩序正しく 空をまわっていること。そしてめぐりめぐる季節のことなど みんなダニエルが教えてくれたことです。

ひとつのいのち

フレディは「葉っぱに生まれて よかったな」と思うようになりました。友だちはたくさんいるし 見はらしはよいし 枝はしなやかだし その上 風通しも日当りも申しぶんなく お月さまは銀色の光で照らしてくれるからです。

夏になると フレディは ますますうれしくなりました。お日さまが早く昇つて おそく沈むので たくさん遊べます。かんかん照りの暑さは なんて気持ちよいのでしよう。夜になつても 昼間の暑さが残っているのですからフレディは気持ちがよくて 夢をみている気分です。

公園に 木かげを求めて 大ぜいの人がかやってきました。

ダニエルは立ちあがり「さあ 体を寄せて みんなでかげを作ろう。」と呼びかけました。

フレディは ダニエルに たずねました。「どうして そんなことをするの？」するとダニエルは「暑さから逃げだしてきた人間に 涼しい木かげを作つてあげ

ると みんな喜ぶんだよ。」と言いました。ダニエルの言ったとおりでした。木かげに おじいさんやおばあさんが 集まって来ました。子どもたちも来ました。お弁当も広げる人もいます。フレディたちは 葉っぱをそよがせて 涼しい風を送ってあげました。

「フレディ これも葉っぱの仕事なんだよ。」

ダニエルの話を聞いて フレディはますますうれしくなりました。老人たちは木かげから出ないで小声で 昔の思い出を話しているようです。子どもたちは 木に穴をあけたり 名前をほったり いたずらもするけれど 笑ったり走ったり 生き生きしています。

けれど 楽しい夏はかけ足で通り過ぎていきました。たちまち秋になり 十月の終りのある晩 とつぜん 寒さがおそって来ました。

フレディも 仲間のアルフレッドも ベンもクレアも ぶるぶるふるえました。みんなの顔に 白く冷たい粉のようなものがつきました。朝になると 白い粉

ひとつのいのち

はとけて 雫がキラキラ光りました。

「霜がきたのだ。」とダニエルが言いました。  
もうすぐ冬になる知らせだそうです。

緑色の葉っぱたちは一気に紅葉しました。公園はまるごと虹になったような美しさです。アルフレッドは濃い黄色に、ベンは明かるい黄色に、クレアは燃えるような赤、ダニエルは深い紫色に、そしてフレディは赤と青と金色の三色に変わりました。

なんてみごとに紅葉でしょう。

いっしょに生まれた 同じ木の 同じ枝の どれも同じ葉っぱなのに どうしてちがう色になるのか フレディにはふしぎでした。

「それはね——」とダニエルが言いました。「生まれたときは同じ色でもい

場所(ばしょ)がちがえば 太陽(たいよう)に向(む)く角度(かくど)がちがう。風(かぜ)の通り具(ぐ)合(あい)もちがう。月(つき)の光(ひかり)星(ほし)明(あ)かり 一日(いちにち)の気(き)温(ぬ) なにひとつ同(おな)じ経(けい)験(けん)はないんだ。だから紅(こう)葉(よう)するときはみんなちがう色(いろ)に變(か)わってしま(しま)うのさ。」

風(かぜ)が變(か)わったのは そのあとでした。夏(なつ)の間(あいだ) 笑(わら)いながらいっしょに踊(まわ)ってくれた風(かぜ)が 別(べつ)人(じん)のよう(よう)に 顔(かお)をこわばらせて 葉(は)っぱたちにおそいかかってくるたのです。葉(は)っぱはこらえきれずに吹(ふ)きとばされ まき上(あ)げられ つぎつぎと落(お)ちていきました。

「さむいよう」「こわいよう」 葉(は)っぱたちはおびえました。そこへ 風(かぜ)のうなり声(こゑ)の中(なか)からダニエルの声(こゑ)が とぎれとぎれに 聞(き)こえてきました。

「みんな 引(ひ)っこしをする時(とき)がきたんだよ。とうとう冬(ふゆ)が来(き)たんだ。ぼくたちは ひとり残(のこ)らず ここからいなくなるんだ。」



ひとつのいのち

フレディは悲しくなりました。ここはフレディにとって 居心地のよい夢のよ  
うな場所だったからです。

「ぼくもここからいなくなるの？」

「そうだよ。ぼくたちは葉っぱに生まれて 葉っぱの仕事をぜんぶやった。太  
陽や月から光をもらい雨や風にはげまされて 木のためにも他人のためにもり  
っぱに役割を果たしたのさ。だから 引っこすのだよ。」とダニエルは 答えま  
した。

「ダニエル きみも引っこすの？」とフレディはたずねました。

「ぼくも引っこすよ。」

「それはいつ？」

「ぼくのばんが来たらね。」

「ぼくはいやだ！ ぼくはここにいるよ！」とフレディは おお声で叫びまし  
た。

アルフレッドもベンもクレアも そのとき が来て 引っこしていきました。見ていると風にさからつて 枝にしがみつくと葉もあるし あっさりはなれる葉っぱもあります。やがて木は葉を落として 裸どうぜんになりました。残っているのは フレディとダニエルだけです。

「引っこしをするとか ここからいなくなるとか きみは言ってたけれどそれは——」とフレディは胸がいつぱいになりました。

「死ぬ ということでしょう？」

ダニエルは口をかたくむすんでいます。

「ぼく 死ぬのがこわいよ。」とフレディが言いました。「そのとおりだね。」とダニエルが答えました。

「まだ経験したことがないことは こわいと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化しつづけているんだ。変化しないものは ひとつもないんだよ。春が来て夏になり秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。きみは春が夏になるとき こわかったかい？ 緑から紅葉するとき

ひとつのいのち

こわくなかったらう？　ぼくたちも変化しつづけているんだ。  
死ぬというのも　変わることにひとつなのだよ。」

変化するって自然なことだと聞いて　フレデイはすこし安心しました。枝には  
もう　ダニエルしか残っていません。

「この木も死ぬの？」

「いつかは死ぬさ。でも　いのち　は永遠に生きているのだよ。」とダニエル  
は答えました。

葉っぱも死ぬ　木も死ぬ。そうになると　春に生まれて冬に死んでしまうフレデ  
イの一生には　どういう意味があるのでしょうか。

「ねえ　ダニエル。ぼくは生まれてきてよかったのだろうか。」とフレデイは  
たずねました。

ダニエルは深くうなずきました。

「ぼくらは 春から冬までの間、ほんとうによく働いたし、よく遊んだね。まわりには月や太陽や星がいた。雨や風もいた。人間に木かげを作ったり、秋には鮮やかに紅葉してみんなの目を楽しませたりもしたよね。それはどんなに楽しかったことだろう。それはどんなに幸せだったことだろう。」

その日の夕暮れ、金色の光の中を、ダニエルは枝をはなれていきました。

「さようなら、フレディ。」

ダニエルは満足そうなほほえみを浮かべ、ゆっくり、静かに、いなくなりました。

フレディは、ひとりになりました。

次の朝は雪でした。初雪です。やわらかでまっ白でしずかな雪は、じんと冷た

ひとつのいのち

く身にしみました。その日は一日中どんよりしたくもり空でした。日は早く暮れました。フレディは自分が色あせて枯れてきたように思いました。冷たい雪が重く感じられます。

明け方フレディは迎えに来た風につて枝をはなれました。痛くもなく、こわくもありませんでした。

フレディは 空中にしばらく舞って それから地面におりていきました。

そのときはじめてフレディは 木の全体の姿を見ました。なんてがっしりした、たくましい木なのでしょう。これならいつまでも生きつづけるにちがいありません。フレディはダニエルから聞いた「いのち」ということばを思い出しました。「いのち」というのは 永遠に生きているのだ、ということでした。

フレディがおриたところは雪の上です。やわらかくて 意外とあたたかでした。引っこし先は ふわふわして居心地のよいところだったのです。フレディは目を

閉じ ねむりに入りました。

フレディは知らなかったのですが――

冬が終わると春が来て 雪はとけ水になり 枯れ葉のフレディは その水にまじり 土に溶けこんで 木を育てる力になるのです。

“いのち”は土や根や木の中の 目には見えないところで 新しい葉っぱを生み出そうと 準備をしています。大自然の設計図は 寸分の狂いもなく“いのち”を変化させつづけているのです。

また 春がめぐってきました。

ありがとうございました。